

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370363

研究課題名(和文) ドイツ語圏における神話・伝説素材の作品化に見られる集合的記憶の諸相

研究課題名(英文) Aspects of collective memory found in the literary works of the myth or legend materials in the German area

研究代表者

園田 みどり (Sonoda, Midori)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：80246363

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、ドイツ語圏の文学作品において神話や伝説素材がどのように採りこまれて作品成立に至っているかを観察し、そこにドイツ人の過去と密接に関連している集合的記憶や想起といった概念がどのように作品に反映されているかを明らかにするものである。この目的を達成するために、文学集団ウィーナー・グループに影響された小説家や詩人、ラディカルな言語実験で知られる作家、戦間期から戦後にかけて人気を博した劇作家のそれぞれの作品を対象にして個々にケーススタディを行い、神話・伝説素材の伝承する集合的記憶の今日的意味を明らかにしつつ新たな解釈を試みた。

研究成果の概要(英文)：This project is intended to examine the way of reworking the myth or legend materials in the literary works of the German area and to elucidate how the conception such as the collective memory or recollection which is related closely to the past of the German people is reflected in these works. For this purpose, each of the project members did a case study about the works of the poets influenced by the Wiener Gruppe or known for radical experiments in poetry or of the dramatist who won the popularity mainly from the first half of the 20th century to the middle of it, and tried to give a new interpretation by explaining the contemporary meaning about the collective memory handed down through the myth or legend materials.

研究分野：ドイツ語圏近現代文学

キーワード：独文学・独語圏文学 記憶 伝説

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究対象の選定の動機

本研究はそもそも、ドイツ語圏の文学において、神話や伝説の素材—むしろギリシアやローマの神話素材は他のヨーロッパ言語圏の文学でも時代を問わず広く様々なかたちで採り上げられているので安易にドイツ語圏だけの傾向とは言えないが—、とりわけ他と比較しても自前の、つまりドイツの素材が未だに好んで用いられることに研究代表者が以前から着目していたことに由来する。個人の生の終焉と共に消失してしまう個人的な記憶を、民族の記憶すなわち集合的な記憶として語り継ぎ、それを記録媒体に移(写)し替えて、有形の文化的記憶として広く伝搬させ延いては後世に残すことにこだわったドイツ文学の一つの特性とその根拠を、個々の作品において明らかにしたいという、漠然としてはいるものの、強烈な知的欲求から生じたものである。

なかでもニーベルンゲンの伝説については、「ニーベルンゲンは未だにあらゆるドイツの素材のうちで最もドイツ的であり、未だにドイツの現実である。ドイツではかつてと同様今なおニーベルンゲンが演じられている」という、20世紀の劇作家ハイナー・ミュラーのことが象徴的に示しているように、英雄ジークフリートとその暗殺、それに端を発するクリエムヒルトの復讐とブルグント族の滅亡の物語は、ドイツ語による文芸における一つの磁場を形成している。この磁力の及ぶ範囲は文芸のみに留まらない。アンゼラム・キーフアーの一連の美術作品やリヒャルト・ヴァーグナーのオペラ(楽劇)、フリッツ・ラングの映画など様々なジャンルへの、テーマや素材の展開が見られ、アメリカ合衆国のハリウッド映画にまでその影響が及んでいるほどである。日本でも若年層のみならず漫画やゲームの形態で接する機会のあることはよく知られている。また、教育の現場においても、学生たちの知的好奇心を引き出すための、時代を超えた絶大な魅力を兼ね備えた対象となっていることを近年ますます痛感させられている状況にあり、近現代ドイツ文学を専門とする研究代表者は、専門外の立場から、中世の文献を読み、関連書籍を繙くなどそれなりに基本的な知識を吸収しつつ、いつかはニーベルンゲンに関連するテーマで研究してみたいと機会を窺っていた。

「ニーベルンゲン」素材は、ゲルマン民族にとっての「英雄時代」である民族大移動期の史実を基に発展した物語の口承が13世紀初頭に文芸素材として採り上げられ、『ニーベルンゲンの歌』として書記作品化されたときにすでに、先史的過去に関する中世人による集合的記憶を映し出すための格好の材料となっていた。これについては研究分担者である山本潤が、『「記憶」の変容—「ニーベルンゲンの歌」および「哀歌」に見る口承文芸と書記文芸の交差、東京大学大学院博士論文、

2010年』(この論文は本プロジェクト期間中の2015年に、同名タイトルの図書として多賀出版から刊行された)において検証している。度重なる「再発見」を経るごとに、その時代の政治や思想的背景に感応しつつ「過去」との対話のうちにその時代自体の諸相を浮き彫りにするものとなっていく「ニーベルンゲン」モチーフは、特に19世紀以降ドイツ人のアイデンティティ形成や国家意識と深く関わり、ドイツ人にとっての集合的記憶としてドイツ史の重要局面で常に表面化してきた。近現代ドイツの国家意識やドイツ人のアイデンティティを考察するうえで、神話および伝説素材の作品化の様相は無視できない重要な要素であるにもかかわらず、個々の作品レベルでの研究があまり為されていないことから、複数の分担者により、様々なタイプの作品において神話や伝説と大きく関わるドイツ文化の最も深い部分に切り込む研究ができるのではないかと考えた。

(2) 研究課題を巡る研究開始時の状況

研究代表者は、すでに科学研究費補助金基盤研究(C)による科研費研究(研究代表者:福本義憲、平成19年~平成20年度、研究課題名:1910年から1960年までのドイツ語圏の社会文化的ディスクルスの研究)の成果報告として執筆した論文『『ケーペニクの大尉』制服、時代のアトリビュート』において、伝説由来の物語『ティル・オイレンシュピーゲル』を想起させる愚者のモチーフを分析し、その扱われ方をテキスト分析によって明らかにする試みを行ったことによって、本研究課題への第一歩をすでに踏み出していたと言える。この研究は、過去の記憶が現在の視点によってどのように想起されるかを検討した研究であり、伝説素材の展開における集合的記憶を扱ったケーススタディであった。他の分担者にも加わってもらい、ドイツ人が固執する過去の集合的記憶の想起による再現化としての作品化がどのように行われているかを、各々の視点から異なる対象にアプローチしてもらおうとくかたちで検証する態勢を整えた。

2. 研究の目的

(1) まず最大の目的としては、先史的過去の集合的記憶に関して中世における理解を反映した『ニーベルンゲンの歌』を始めとする、神話や伝説を素材とする諸作品を研究対象として、その作品化の多様性のうちに、集合的記憶の変容の諸相に光を当て、ドイツにおけるナショナリズム研究の一端となるようなケーススタディを目指すことである。

(2) 次に『ニーベルンゲンの歌』のみならず他の神話および伝説素材の現代における再作品化を検討し、その意義を明らかにすることである。

(3) さらに、やや範囲を広げ、そもそも根源的に神話および伝説を意識した、あるいはこれらと結びついた「想起」の概念が現代の言語実験系の作家の作品化にどのように展開されているかについても考察が深められることが期待された。

3. 研究の方法

(1) 以上の研究目的のうち、まず「ニーベルンゲン」素材を扱っている作品については、対象テキストの精読とそれに基づく文献を用いての検討を行う傍ら、「ニーベルンゲン」素材の系譜における主要作品のテキスト研究を計画していた。具体的には以下の通りである。

① ドイツにおける神話・伝説素材のロマン主義的な文脈における作品化の嚆矢となっているフリードリヒ・ド・ラ・モット・フケーの『北方の英雄』3部作のテキスト研究。

② フケーとは異なり、北欧に伝わるより原初的な神話・伝説素材ではなく、中世ドイツにおいて詩作された『ニーベルンゲンの歌』自体を再作品化したフリードリヒ・ヘッベルの演劇作品『ニーベルンゲン. 3幕から成るあるドイツの悲劇』3部作のテキスト研究および、この作品の強い影響下にあるフリッツ・ラングによる映画『ニーベルンゲン』の分析と解釈。

③ 海外出張での演劇鑑賞や史跡探訪、他の作品との比較等によって神話・伝説素材自体への理解をさらに深める。その際、比較対象作品の候補として挙がっていたのは、リヒャルト・ヴァーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』、モーリッツ・リンケの演劇作品『ニーベルンゲン. ジークフリートの女たち/ブルグントの最後の日々』、ハイナー・ミュラーの演劇作品『ゲルマーニア ベルリンの死』等である。

④ ③によって神話・伝説素材が研究対象である作品のうちどのように反映されているか、例えばドイツ人の集合的記憶としてのナチズムがどのように描かれていて、そこにこれらの素材がどのように関わっているかを検討する。このようにすでに文芸作品として世に出、受容されている対象を、それが書かれた時代(過去)ではなく現代(現在)において再度検討することは、広く知られ後世にも残るであろう文化的記憶としての意義と価値に新たな批判の光を当てること、すなわち記憶の「歪曲」や「縮小化」への危険性を孕んではいないかについて検討し、それを踏まえて新たな解釈を試みることに他ならないと考える。

(2) 他の神話および伝説素材の現代における再作品化の研究や、言語実験系の文芸作品の研究に際しては、各自海外出張での資料・文献収集とその検討や、シンポジウムや交流会への参加等による意見交換を通じて知識を深め、各自の研究対象へのアプローチを模

索しつつ作品の分析、考察、そして解釈へとつなげる。

4. 研究成果

(1) 研究代表者である園田みどりは、カール・ツックマイアーの二大大戦間期の演劇作品『ケーペニクの大尉』がティル・オイレンシュピーゲルの伝説素材を介してドイツ人の集合的記憶に批判のメスを入れた作品となっていることを明らかにした科研費研究を基に、同劇作家の、今度は第二次世界大戦後の演劇作品『悪魔の将軍』の検討を行った。作品内に音楽として立ち現れることで瞬時そのイメージを喚起されるに過ぎないニーベルンゲン伝説素材の一つジークフリート伝説が、作品においてどのような意味を持っているのか、具体的にいえば、伝説素材が、『ケーペニクの大尉』におけるティル・オイレンシュピーゲル伝説の役割から類推されるように、ナチズム批判となるようなかたちで作品に組み込まれているのか否かが最大の関心であった。なぜなら、『悪魔の将軍』(1946年)は発表当時ドイツ語圏で最も上演回数が多かった作品として、その与える影響は大きく、今日においてその文化的記憶としての価値を検証することは、本作の受容のみならず、今後の伝説素材研究においても大きな意味を持つてくるであろうと考えたからである。

まず、作品中のジークフリート素材を検討し、正しく理解するために、中世叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の原文とヴァーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』の音楽と台本、さらにはフリッツ・ラング監督の『ニーベルンゲン』の映像とを比較・検討し、その相違を洗い出した。その際、ヴァーグナーと同年代生まれで同時代に活躍した劇作家フリードリヒ・ヘッベルの生誕200年に当たる2013年に、近年ヴォルムスで毎年夏季に開催されている「ニーベルンゲン演劇祭」を訪れ、ヘッベルのニーベルンゲン悲劇の新解釈である現代風『ニーベルンゲンの歌前篇』を鑑賞できたことは、政治的バイアスのかかったヘッベルの作品が現代においてどのように再解釈されるかを知る良い機会になった。事前に行っていたヘッベル作品のテキストの分析・検討によって、ディーター・ヴェーデルの翻案が、中世叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の直接的な再作品化であるヘッベルの悲劇を、キリスト教世界と異教の世界の対立図式に描くことのできる、ある意味閉じた完全な世界から、視覚映像化によって躍動的な文学空間へと解き放つことで、新たな知とイメージを紡ぐ可能性と新たな生命を獲得していると捉えることができた。新たな解釈と再作品化の現場を目の当たりにしたことで、演劇が「記憶 Erinnerung」の実践への展開、換言すれば「想起する erinnern」行為そのものに関わる文化装置として大きな影響力を持つことを改めて認識させられたことは、ツッ

クマイアーの戯曲の受容を考えるうえでも意義があった。

また、これと並行して、『悪魔の将軍』成立の動機や背景となった史実やそれにまつわる作家の自伝的な叙述を検討し、作家と作品の題材に対する距離を把握し、それが作品にどのように表れているかを、作品そもそもの企図と突き合わせて検討した。結果として、劇中の一場面で、それもヴァーグナーの音楽としてしか表れないジークフリートのモチーフが、主人公の人物造形に悉く影響を及ぼす、作品全体に関わる核心的なモチーフとなっていることを突きとめた。また、このモチーフが戯曲の全篇に通奏低音を鳴り響かせていると捉えられるがゆえに、著者が期待し、かつ作品が形式として打ち出そうとしている、ナチズムにまつわる史実の象徴的表現だろうとする方向性と、劇中で繰り広げられる印象的なエピソードやシーンの性格上そこにまずヒロイズムを期待せざるを得なくなる受容の実態との間に齟齬が生じていることを指摘し、その齟齬の中にこそ、時代を経るに伴い変容してきたニーベルンゲン素材とともにナチズムの集合的記憶を呼び戻した本作の看過されざるべき問題性が横たわっていると結論づけた。この新たな試みとしての批判的解釈を、本プロジェクトの報告論文集において『『悪魔の将軍』見えない傷跡—ニーベルンゲンの痕跡をたどって—』というタイトルの論文に発表した。

本作の研究の過程で、ハイナー・ミュラーの関連作品も採り上げたい意向はあったものの、比較材料として適さないうえに、包括的な扱い方をするには準備不足であったために実現しなかった。今後の課題としたい。また、パウル・ツェランのニーベルンゲンをモチーフとする詩や、クリストフ・ハインの小説作品『龍の血を浴びて』等も視野に入ってはいたものの、今回の課題の下で考察を試みるには手に余る対象であったため、機会を改めて研究を進めたいと考えている。

(2) 山本潤は、中世盛期から後期にかけての英雄伝説素材の持つ歴史性を検証するとともに、『ニーベルンゲンの歌』が再発見された18世紀半ば以降のニーベルンゲン素材受容を検証し、その問題点と近代ドイツ史に与えた影響の俯瞰的視点からの総括を試みて、論考「破滅の神話—近代以降の『ニーベルンゲンの歌』受容とドイツ史」にまとめ、西山(編)による共著『カタストロフィと人文学』に掲載した。

また、前衛作家トーマス・クリングと中世を比較した論文『トーマス・クリングと中世—オスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタインとの関わりから』は、中世素材の現代における再作品化の意義を主題としており、本プロジェクトにおける一ケーススタディとしての意味を持つ。

英雄叙事詩は共同体における偉大な王や

戦士たちにもつわる集合的記憶を伝承するメディアであるが、その英雄叙事詩の素材の持つ歴史性をテーマとしたディートリヒ研究では、中世研究者との意見交換を行い、その議論を基に論文『「ディートリヒの逃亡」における「作者」像—ジャンル交差の諸相から』にまとめた。研究者間交流を踏まえて得られたこの研究の成果の意義は大きい。

また、『ディートリヒの逃亡』の歴史構造に決定的な役割を果たしている系譜的前史の大幅な省略の根拠についての解釈を中心とするドイツ語の論文 *Konzeption der Geschichtlichkeit in der genealogischen Vorgeschichte von ‚Dietrichs Flucht‘* が日本独文学会の欧文誌に掲載されたことは、本研究の高い学術的な価値が認められたことの証左であることはいままでのない。

今回のプロジェクトにおいて、中世文芸と現代の作家との比較研究に端緒を見出したことで、この方面での研究の発展的な継続が期待される。

(3) ヴァルター・ループレヒターは、神話的語り口を歴史的な語り口と融合させ、新しい表現形式へと発展させたオーストリア人作家コンラート・バイアーの研究を行った。

ウィーンでの文学館や資料館、オーストリア国立図書館等の訪問による資料収集・分析を通じて準備したシンポジウムで講演を行い、現地の研究者との意見交換を経て2015年に共著 Konrad Bayer および作家ローベルト・ムーゼルとの比較において論じた論文 *Auf der Schwelle. Wirklichkeit als „Aufgabe und Erfindung“ bei Robert Musil und Konrad Bayer* を執筆した。

またバイアーの小説モンタージュ『ヴィトゥス・ベーリングの頭』が、史実そのものを描くに留まらず、極限体験やそれに伴う極端な思考形式が神話と深く結びつく様子を併せて表現していることを明らかにし、本作品を、神話・伝説素材と歴史というそれぞれの集合的記憶が融合し作品化された一例として捉えられるという結論を、2016年の論文『民族詩人兼神話生成詩人としてのコンラート・バイアー』において導き出した。いずれの論文も、研究者間交流の場を経て練られた重要なコンラート・バイアー研究である。

(4) 犬飼彩乃は、アルノ・シュミットを例にドイツ語圏後期モダニズム文学における記憶概念の変遷に注目した。ジョイスやプルーストが代表的作家とされるモダニズム文学では、個人的記憶の想起を観察した結果が語りの形式に大きな影響を与えたが、二つの大戦を経験した後のドイツ語圏では個人的記憶と集合的記憶が極度に接近することとなり、その結果として、シュミットが新しい散文形式を考案するに至ったと考えられる。この新たな散文形式では、散文の多層性を確保することによって、極度に個人的な記憶と、

神話や歴史をはじめとする集合的記憶の想起が同時に企図され、過去に立脚した現存在の写実的描写が可能となった。その考察の結果を本プロジェクトの報告論文集に論文として発表した。難解なテキストで知られるアルノ・シュミットの数少ない日本人研究者としてドイツ本国でも認められており、本研究を足掛かりとして今後伝説素材を基にしたアルノ・シュミットの他の作品についての研究も期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

① 園田みどり、『悪魔の将軍』見えない傷跡—ニーベルンゲンの痕跡をたどって—、「ドイツ語圏における神話・伝説素材の作品化に見られる集合的記憶の諸相」報告論文集、査読無し、2016年3月、11-43頁

② Rupprecher, Walter、Konrad Bayer als Ethno- und Mythopoeet. Am Beispiel seines Montageromans *der kopf des vitus bering*、「ドイツ語圏における神話・伝説素材の作品化に見られる集合的記憶の諸相」報告論文集、査読無し、2016年3月、1-9頁

③ 犬飼彩乃、記憶と写真—アルノ・シュミット散文理論からみる想起の力、「ドイツ語圏における神話・伝説素材の作品化に見られる集合的記憶の諸相」報告論文集、査読無し、2016年3月、45-58頁

④ 山本潤、名前と作者—中世俗語文芸における作者性、日本独文学会研究叢書、査読無し、第110号「名前の詩学—文学における固有名あるいは名をめぐる諸問題」、2015年10月、18-33頁

⑤ 山本潤、「ディートリヒの逃亡」における「作者」像—ジャンル交差の諸相から『詩・言語』、査読有り、第81号、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語・ドイツ文学研究会、2015年9月、61-90頁

⑥ Yamamoto, Jun、Konzeption der Geschichtlichkeit in der genealogischen Vorgeschichte von ‚Dietrichs Flucht‘、Neue Beiträge zur Germanistik、査読有り、Nr. 151、2015年、75-91頁

⑦ Rupprechter, Walter、Auf der Schwelle. Wirklichkeit als „Aufgabe und Erfindung“ bei Robert Musil und Konrad Bayer、人文学報、査読無し、第510号、2015年3月、1-12頁

⑧ 山本潤、トーマス・クリングと中世—オ

スヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタインとの関わりから、日本独文学会研究叢書、査読無し、第94号、2013年、5-22頁

[学会発表] (計 3 件)

① 山本潤、Geschichtskonzept in der genealogischen Vorgeschichte von ‚Dietrichs Flucht‘、第五回中世コロキウム「ドイツ中世文芸における歴史性と虚構性」、2015年3月20日、慶應義塾大学(東京都・港区)

② Rupprechter, Walter、„alles kann dies und jenes heissen“. Kontingenz als Darstellungsprinzip bei Konrad Bayer. Beim Symposium: Konrad Bayer: Texte, Bilder, Sounds. 18-21. September 2014、2014年9月20日、Mürzzuschlag(オーストリア)

③ 山本潤、中世ドイツ文学に見るローマ観—『ディートリーヒの逃亡』『皇帝年代記』および『モーリッツ・フォン・クラウン』を題材に—、西洋中世学会第5回大会シンポジウム、2013年6月23日、中央大学(東京都・八王子市)

[図書] (計 3 件)

① 山本潤、「記憶」の変容—『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』にみる口承文芸と書記文芸の交差、多賀出版、2015年、総294頁

② Kastberger, Klaus / Eder, Thomas (編)、Rupprechter, Walter / Kastberger, Klaus / Eder, Thomas / Srienc, Dominik / Innerhofer, Roland / Eisenhuber, Günther / Fuchs, Franziska / Oberhumer, Georg / Kohlmann, Oliver / Jutz, Gabriele / Erber, Eva / Tezarek, Laura / Steinlechner, Gisela / Hanneschläger, Vanessa / Achleitner, Friedrich / Wiener, Oswald / Radax, Ferry 著、Konrad Bayer: Texte, Bilder, Sounds、Zsolnay、2015年、300(217-228)頁

③ 西山雄二(編)、ミシェル・ドゥルギー / ジャン=リュック・ナンシー / ジゼル・ベルクマン / 野元弘幸 / 左古輝人 / 綾部真雄 / 高桑文子 / 荒木典子 / 山本潤 / 赤塚若樹 / 大杉重男 / 寺本成彦 / 寺本弘子著、カタストロフィと人文学、勁草書房、2014年、320(221-245)頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

園田 みどり (SONODA MIDORI)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：80246363

(2) 研究分担者

ループレヒター ヴァルター
(RUPRECHTER WALTER)
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：50254123

古屋 裕一 (FURUYA YUICHI)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：10229130

山本 潤 (YAMAMOTO JUN)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：50613098

犬飼 彩乃 (INUKAI AYANO)
首都大学東京・人文科学研究科・助教
研究者番号：70622455